

～美しい国土づくり10周年記念～ 東北の景観を考える座談会 対談録

平成17年12月9日(金) 仙台市戦災復興記念館 記念ホール

対談者：青山 俊樹 氏（水資源機構 理事長）， 篠原 修 氏（東京大学大学院 教授）
司会： 東北地方整備局 企画部 環境調整官 遠藤 真一

司会（庄司） 皆様、お待たせをいたしました。東北の景観を考える座談会を再開させていただきます。これより、対談されるお二方をまず初めにご紹介させていただきます。

最初に、独立行政法人水資源機構理事長の青山俊樹様です。青山様は、京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了後、1969年に当時の建設省に入省なさいました。近畿地方建設局姫路工事事務所長、大臣官房技術調査室長、中部地方建設局企画部長、河川局開発課長、そして東北地方建設局長、河川局長、技監を経て、2002年、国土交通省事務次官に就任なさいました。2004年より現職にお就きでいらっしゃいます。

それでは、どうぞ皆様、大きな拍手でお迎えください。青山様、どうぞステージへお越しください。（拍手）

続きまして、もうお一方ご紹介させていただきます。

東京大学大学院社会基盤学専攻教授の篠原修様です。篠原様は、東京大学大学院工学系研究学科土木工学専攻修士課程修了後、株式会社アーバンインダストリー、東京大学農学部助手、そして当時の建設省土木研究所主任研究員、東京大学農学部助教授、同工学部助教授を経て、1991年より現職にお就きでいらっしゃいます。また、土木学会デザイン賞最優秀賞、優秀賞などを多数受賞され、「土木景観計画」などの著書も多数ございます。幅広くご活躍でいらっしゃいます。

それでは、どうぞ皆様、大きな拍手でお迎えください。篠原様、どうぞステージへお越しください。（拍手）

こちらのお二人の対談、これからの司会は東北地方整備局企画部環境調整官、遠藤真一が務めさせていただきます。（拍手） それでは、どうぞよろしくお願いいたします。



美しい国土づくりのきっかけ

司会（遠藤）　ただいまご紹介のありました環境調整官の遠藤でございます。よろしくお願いいたします。

大変僣越でございますが、司会進行の大役を仰せつかっておりますので、気張って務めてまいりたいと思っております。ひとつよろしくお願いいたします。

本日は、これから約1時間にわたりましてご対談いただきます。東北への景観に関する取り組みに今まで大変寄与されまして、またご造詣が最も深いお二方にご対談いただけるということで大変ありがたく思っております。お二方とも大変お忙しい方でございますが、快くこのご対談をお引き受けいただきまして本当にありがとうございます。

それでは、座談会に早速入らせていただきます。基本的にはお二方にご自由にご発言いただく、ご対談いただくということでございますが、一応大きく二つに分けてございまして、第1部としまして、ちょうど10周年に当たりますので、今まで10年間でどういうふうな取り組みがあってどんなふうに変ってきたかという点についてお話しいただきまして、第2部といたしまして、その後、近未来ですね、これから10年ぐらいでどういうことを期待されるか、どういうふうな方向がよろしいか、ご議論と申しますか、ご対談いただければありがたいと思っております。今、二つに分けてと申し上げましたが、お話はまず水ものでございますので、本当にご自由なご議論いただければありがたいと思っております。

それでは、まず最初に美しい国土づくりへの取り組みのきっかけにつきまして、青山理事長の方から口火を切っていただければありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

青山理事長　青山です。何度もお話をさせていただいていることになりますので、また重複するかもしれませんが、私が当時の東北地方建設局に着任しましたのが平成7年11月1日でございます。11月5日だったと思いますが、初仕事で甲子峠に行く用事がありまして、土曜日だったのですが、高速道路、磐越道を走りまして、その時に両側の山々が紅葉してございまして、それも非常にスケールの大きな紅葉でして、山また山が全山、ずっと奥まで紅葉してございまして、あの風景が本当に東北に来たなという、まさに原体験と申しますか、非常に強いインパクトを受けました。



その後、管内を大体月3,000キロ、年間3万5,000から4万キロのオーダーで走ったわけであり

ますが、走ったといっても私が運転するのではなくて、運転手さんの「マツハコウゾウ」というあだ名の佐藤幸三さんに乗せてもらって、東北各地を見させていただいて、本当に四季折々の自然の美しさに強い印象を受けました。

実は私は生まれ育ちは京都の清水寺のそばでありますので、それはそれで京都の風景というのは非常にいい風景だという思いもありますが、特に自然のスケールということを考えますと、この東北はすばらしいと思います。これから冬に入ってきてまして雪が降ると、黒いという表現が正しいような木々が葉を落として、白い雪の上に林立し、どんよりと曇った空から雪が降る。この冬の風景も水墨画の風景のような趣がありますし、また春になると、私が子供のころは若葉というのは黄緑色というように決まっていたのですが、実際は違うのですね。白い色からクリーム色から黄色から黄緑色など、いろんな種類の若葉が、また花も咲きますが、燃えるようにまた山を彩る。これが夏に向かってだんだんと緑が濃くなっていく。それと川もそうですね。雪解けのときの東北の川の清冽な流れというのは非常に印象的でありました。特に最上川の支川などはすばらしい流れになりますね。

こういった四季折々の東北の自然を見ていまして、仙台のまちも私は日本の都市の中では美しい部類に入る都市ではないかと思うのですが、やはり自然の美しさに比べれば、人間の造った「まち」はまだ美しく出来るのではないか、なれるのではないかというふうに思います。そういった意味で、東北の自然に調和したまちづくり、また田園風景もそうですが、それができればすばらしい国土になるのではないか、それが東北での原体験です。

司会（遠藤） ありがとうございます。まさに目に浮かぶような情景のすばらしいお言葉、ありがとうございます。

それでは続きまして、篠原先生の方から東北との出会いと申しますか、きっかけにつきましてお話しただければありがたいと思います。

篠原教授 忙しくて大変だと紹介いただきましたが、確かに最近はちょっと忙しいのですが、今から申し上げるような理由で、お招きいただきましてありがとうございました。

一つはえらく古い話になりますが、中学3年のときに東北一周の修学旅行で来ているのです。今、平泉のお手伝いもしていますが、二、三年ぐらい前ですかね、久しぶりに平泉に行ったら、平泉の駅舎は変わっていましたが、ホームが昔そのまま非常に懐かしい思いがしました。中3の春でしたから、もう46年前ですね。花巻温泉に泊まったこととか、いろんなことでいい思い出があります。



もう一つは、おふくろの出身が、東北ではなくて栃木県の矢板という宇都宮の北の方ですが、あの辺になりますと、茨城も栃木も北の方になるともう半分東北で、しゃべる言葉も割とずうずう弁ですよ。そんなことで、仕事で九州に行ったり北海道に行ったりいろんなところに行きますが、東北に来ると、おふくろの出身地で実家もあって、中学校ぐらいまでしょっちゅう遊びに行っていたということもあって、実家に戻ってきたような感じがします。

司会（遠藤） 大変ありがたいお話で、お二方とも本当に東北にご縁があって、また東北を愛でいただいているということがわかったような気がいたします。ありがとうございます。

それでは引き続きまして、ちょっと堅いお話になりますが、今日のお二方、青山理事長と篠原先生のご指導のもと、東北で美しい国土づくりのアドバイザー制度とか、またプロポーザル方式とか、またそれを受けて担当官制度とか色々やっております、これも10カ年を迎えたわけでございます。これにつきまして、ご感想、またご意見などございましたら、まず青山理事長の方からひとつお願いしたいと思います。

青山理事長 東北の国土づくりに非常に大きな影響力を持っているのはやはり東北地方建設局だろうと思ひまして、我々が造る構造物、道路とか、また河川でもいろんな構造物を造るわけですが、そういった構造物が本当に次の世代にまで美しさの意味でも誇れるような構造物を造れないだろうかということで、アドバイザー制度については篠原先生に非常にご尽力いただいた訳です。

言い方を変えますと、戦後、猛烈な勢いで経済成長しました。東京を中心に効率性重視、機能性重視ということで突っ走ってきたわけですね。先程「用、強、美」という言葉がございましたが、これはローマ時代の技師のヴィトロピウスという方が言われた言葉のようですが、塩野七生さんの『ローマ人の物語』などを読みますと、「用、強、美」という言葉そのものは出てこなかったと思いますが、まさにそういう精神でローマ時代、公共施設を造ってきたということであります。そういったバランスのとれた、用だけではなくて、また強だけではなくて、美も入れた、バランスのとれた国土づくりが要るのではないか。そのためにはその美のことを一生懸命考えてくれる存在が要るのではないか。どうしても役人は転勤がある。これはもう宿命的なものであります。すると1カ所においてずっとその地域の美しさというものを考えてくれる存在が必要なのではないかと思ひ、美しい国づくりのアドバイザー制度というものを組織しようではないかということにしたわけですが、アドバイザーといっても初めての経験の方もたくさんいらっしゃいますから、まず篠原先生を委員長にして全体的な委員会を作り、その中で岩手なら岩手、青森なら青森ということでの委員会をそれぞれ作っていただいたというふうに記憶しております。

そういった形で、ずっとその地域の美しさを考え続けるという立場の方から私たちがやる仕事に対してアドバイスをいただいて、それでフィードバックしながら物づくりをすればどうだろう。それからもう一つ大事なことは、完成予想図を作ることだと私は思っております。これは地域住民の方にもこの道路ができればこの風景はこう変わりますよと、ここの河川改修をやればこの風景はこ

う変わりますよということをご説明するためにも、絵が要るのではないかと思います、ある程度以上の規模の工事はすべて完成予想図を作りましょうということをお願いしたのです。今それがどうなっているのかちょっと自信がないんですが、そのフォローは是非やってほしいなと思います。
この10年間、私は東北地方整備局の職員の皆さんの意識が着実に変わってきているのではないかと思いますし、またそれは非常に嬉しいことです。

それからもう一つ、ガードレールの話を見せていただければと思います。「四種の神器」と呼んでいるのですが、ブロック塀、看板、ガードレール、電線・電柱、この四つは街中だけではなくて田園風景にも非常に大きい影響を与えています。特に東北のような美しい田園風景なり海岸線がある、もしくは河川がある、そこに造る防護柵はやはり景観に配慮した、かつ機能も備えたいものがあるはずだということで、天野先生を委員長にした委員会を作ってもらいました。そこでいろんな議論をしていただいて、コンペまでしていただいて作ったのが「東北モデル」と呼ばれるガードパイプなのです。松島の辺だとか、この間行ったら酒田の最上川沿いにあるのを見て非常に心強く思いましたが、そういった意味でも東北の景観は非常に前向きに整備局の方が取り組んでいただいているのではないかと思います。

司会（遠藤） ありがとうございます。美を見守っていくための大変すぐれた有機的な組織づくりをされて、お蔭さまでその成果がしっかり出てきているというコメント、本当にありがとうございます。

私も郡山国道事務所でちょうど今の青山理事長が局長でいらしたときに副所長をやっていましたが、全工事について何とかパースを作って、それが職員の意識高揚にも非常に寄与したという記憶がございます。手前なことですが、失礼しました。

アドバイザーの中心的存在で委員長をされていらっしゃる篠原先生から、その制度につきましてご感想等をお願いしたいと思います。

篠原教授 話を最初に聞いたというかお願いされたときは正直びっくりしました。なぜかという、私自身は橋が最初だったのですが、昭和61年から実際のデザインを手がけておりました。ちょっと古い話になりますが、今日紹介はありませんでしたが、実は平成元年から平成3年度にかけて丸3年間、当時東大にいらした中村英夫先生が委員長になりまして、私が幹事長で、当時の建設省の河川、道路、都市の土木部隊が全員集合して、あのときは道路公団も首都高公団も、それこそ今青山さんがおられる水資源公団も、7公団だったと思いますが全部入って、公共事業のデザイン水準を上げようということで海外視察にも何回か行きました。私はオーストラリアに行きましたが、丸3年間やってレポートを作って、それがかなり踏み込んだ提言までありまして、大学もこういう教育をして下さいなどとそんなことまで書いてあるレポートなんです。それでうまく動くかなと思ったのですが、やはりまだまだ当時は根づいていなくて、割と飾り立てるようなデザインが流行りました。

平成元年から3年というのはバブルの真っ最中と言ってもいいと思うのですが、バブルがはじけて、しばらくして公共事業にも影響が出てきました。さすがに私に直接そう言う人は余りいませんでしたが、ともかくコスト縮減であると。景観の時代は去ったと。当時のよく聞いた言葉ですよ。今からコスト縮減の時代であるというようなところがちょうど平成7,8,9年ぐらいですね。先程紹介がありましたように、いいものを造るので、最終的には100事業以上やりました。局を挙げてやるので手伝ってくれという話がありまして、そういう時代だったものですから私は非常に驚きました。

ただ、青山さんと約束して5年間きっちりやりましょうということで、5年間きっちりやりました。途中から田崎さんへ変わったのかな。正直なところびっくりしましたが、私にとっては与えられた良いチャンスだと思えたので、もうちょっと若い人も入れて随分議論しました。ただ、後で聞いた話ですが、アドバイザーがつき過ぎて、A先生が言うのとB先生が言うのと違うとかというのでちょっと困った事務所もあったというふうに聞いています。

美しい国土づくりに必要なのは ” 情感 ” の共有

司会（遠藤） アドバイザーの先生方の熱心なご議論があれば、ますますいいものができると思います。アドバイザー制度につきまして、最初から、引き続き今までご指導いただきまして本当にありがとうございます。

それでは、10カ年振り返りまして、東北発信の景観の試みやいろいろな東北の中の景観も大分向上している、というふうにお話しいただいたとご理解させていただきます。ありがとうございます。

続きまして、これから近未来、大体10カ年ぐらい考えまして東北はどうしていったらいいかというふうな第2部の方に移らせていただきます。

はじめに、これから近未来がどうなるかというお話の前に、今までのご経験から美しい国土づくりの苦労とか難しさとか、また楽しさも交えた中で、何でも「いのちをもてなす」という著作で大



変有名な国立環境研究所の所長をされていた、また医学博士で東大名誉教授でいらっしゃる大井玄先生の「情感」という言葉に篠原先生が大変感銘されているという話を聞いておりまして、このあたりをお話の切り口としていただければありがたいなと思っております。なお、情感という言葉の「じょう」は情緒の情、「かん」は感心するとか感動するとか、そういう情感という言葉だそうであります。よろしくお願いたします。

篠原教授　今遠藤さんが言われたように、大井玄さんの「いのちをもてなす」という本を読んでいます...、何でそんな本を読むかというと、ちょっと長くなるかもしれませんが、私は専門が景観とかデザインとかですから、若いころはデザインの本を読んだり都市の本を読んだり色々していましたが、本音を言いますと、最近は余りそういう本はおもしろくないので読まないんです。書いてあることはこういうことを言いたいんだなとすぐわかるというか、年とったせいだと思いますが、割と違う分野の本を読んでいます。最近は生物の本を読んだり、昔も結構精神病の本を読んだりしていますが、あの人は臨床医ですから、患者さんつき合っていて、ありきたりのアンケート的な回答だと相手を治せないんでしょう。つまり、相手の感情まで入っていった感情を共有しながらやらないと本音のところはわからない。ですから、数は少ないのですが、人間に対する非常に深い考察をやっているのだから、読んでいておもしろいんです。

そういうことで大井玄さんという人の本を読んでいます、なかなかいい本だなと思っていたら、環境省の委員会で、生物多様性国家戦略の委員会というのがあって、僕は全くの部外者ですが何故かそこに入っているんですが、そこで大井さんにお会いしました。そこにはお医者や文化人、森林をやっている人、動物をやっている人、いろんな人がいて、ちょうど前々回でしょうか、輸入動物がどうだとか、どういうモニタリングをやっているとか、今どういう状況にあるかとか、2時間ぐらいろいろ説明いただきました。会議がそろそろ終わりになるころに、環境省の司会の方が「何か質問あるいはご意見はございませんか」と言ったら、大井先生が「はい」と手を挙げて、「いろんなことを説明していただいて、知識は随分入った。だけど、自分の経験ではこの会場を出たら多分1%ぐらいしか覚えていない」と。世の中は情報を共有しなくてはいけない、情報が共有できていないからいろんな食い違いが起こるんだと。我々の分野でいうときつと住民参加ですよ。住民に十分な情報を与えていないから事業についてもよく理解できていないし、情報を十分与えれば官は官、民は民の役割分担がはっきりしてうまくいくのではないかと、そういうことがよく書いてありますよ。が、大井先生に言わせれば情報を共有しても何の役にも立たないというのです。つまり、それは自分の臨床経験から出ているのじゃないか。**情報を共有しても人は動かない。情感を共有することが大切である。要するに感情の方が重要だというわけですね。**

そう言われて、確かにそうだなと思って振り返ってみると、私が参加した件が自分で一番よくわかりますのでそれを例に申し上げますと、私がデザインのアドバイザーなり設計指導なりで入ってうまくいった例というのは、担当の職員の方、あるいはもう少し広がると地元の住民の人、あるいはもう少し特定すると住民とはいいながらも我々に近い大工さんとか石工さんとか、そういう人と情感を共有したときはうまくいっているのですよ。

だから、これは今後の課題だろうと思いますが、情感をいかに共有するか。やはりアドバイザー制度で一番よかったのは、当時の東北地建の職員の方と一緒にやったということだと思います。つまり、先程の情報の共有でいうと、デザインのアドバイスしてください、あるいは指導してください、条件はこうです、地元の情報はこうです、コストは幾らですと全部情報を与えました、だから先生の方でコンサルタントとやってそれを戻してもらえばいいというのは役割分担ですよ。情報は共有される。だけど、これではおもしろくも何ともないし、職員にやる気が出てこない。

今考えると僕は随分むちゃを言ったなと思うのです。紹介があったように北上分流堰のときは、古い堰は全部取ってしまって、堤防を新北上川沿いに直線的に整備して、真ん中を水路で抜いてそこに新しい堰を造ると言ったときに、それはちょっと止めてくださいと。あのとき、初めて青山さんと温泉に泊まったのではなかったかと思いますが、そういう意味でも情感をちょっと共有したなと（笑）。だから、従来の役所側の論理からいうと随分無茶を言ったと思いますが、現場を一緒に見に行ったり、どういうやり方があるだろうかといろんなことを考えて図面や模型にし、それを前にして議論する。職員の方も我々もお互いに段々イメージが湧いてくる。そういう情感の共有というか、もっとわかりやすい言葉で言うと体験を共有するというか、そういうプロセスが非常に重要で、住民参加の場合でも同じだと僕は思っています。そういう意味で東北はうまくいったと思う。

さっき冒頭でちょっとおふくろの話もしましたが、東北の人は嘘を言わないので非常に付き合いやすいのです。褒め言葉で言っているかと思われるとまずいのでちょっと言いますと、九州の人もやりやすいのです。ところが、やりにくい所も現実にあるのです。そう言っているのだが本音は違うというのが後でわかるんですね。そういう意味では、何と云うのか、**質実さが残っているというのでしょうか。これはこれからの地域づくりをやっていく上で非常に重要な資質だと思います。**

司会（遠藤） 大変ありがとうございます。今、非常に重要なご指摘がございました。情報の共有よりも感情の共有ということで、そういう意味では最後に東北を褒めていただきましてありがとうございます。

今のお話につきまして、青山理事長どうでしょうか。

青山理事長 私も全く同感ですね。私は東北に来る前は河川局の開発課長というポストで、ダム、水資源開発担当だったのです。そこで、長良川河口堰の本格運用というときに大臣のご決断をいただく担当の課長だったわけですが、長良川の河口堰についても、事実とは違うんだが、「ダムのない日本唯一の川・長良川を守れ、絶滅の危惧にあるサツキマスを守れ」という反対派の天野礼子さんを中心とする方々の出されたキャッチフレーズは、やはり人々の心を非常に揺さぶったんだろうと思います。幾らこちらが理論で説明してもマスメディアは取り上げてくれない。むしろ情感が反対派の方にはるかに傾くという流れがありました。これは初動のときのマスコミ対応が非常に悪かったということもあるのですが、それ以上に私は時代の流れと云いますか、そこに住んでいる人々の心に訴える何かがあったんだろうと思います。

それから、徳島県の吉野川の第十堰の問題もそうだと思います。河川改修というのは安全を守るための仕事ですが、最初に当時の建設省が出した完成予想図は、歴史、文化、伝統といったものに対する配慮がないと云いますか…。機能的には固定堰よりも可動堰の方がいいに決まっている訳です。ハンドルのない自動車とハンドルのある自動車とどちらがいいかといったらハンドルのある自動車の方がいいのと同じように、可動堰と固定堰であれば可動堰の方が機能的にははるかにすぐれる訳です。ところが、何百年にもわたってこの堰がこうやって続いてきたと。実際行ってみるとコ

ンクリートの固まりだらけの堰ですが、やはり歴史、文化、伝統といったものに対して河川サイドが非常に無神経ではないかという感覚が住民の間にあるというのも紛れもない事実なんだろうと私は思います。そういった意味で、我々も情を大事にする、思いを大事にするという姿勢が要るのだらうと思います。

また、反省すれば、物を造るということに対する情熱は土木に従事する人は非常にあるわけですが、物を造ること自体が目的化するというのはやはり間違いなのだろうと思います。人々の暮らしがより良いものになる、それはまさに公共事業、シビル・エンジニアリングの目的であるべきであって、我々がやっている事業というのはそのための手段なんですね。それが、事業そのものが自己目的化するというところはやはり考えなくてはいけないだらうと思います。

それから、もう少ししゃべっていいですか。

司会（遠藤） どうぞ。

まちは住む人の心を映す。だから美しい国土づくりは東北が先頭

青山理事長 今回の情感の話が出ましたので、私はもう一つ、やはり美しい国づくりは東北でない
とダメだといいますが、東北に是非先頭を切ってほしいという思いは10年前からありました。とい
いますのも、機能を重視する機能一辺倒の施策というのは東京を中心にやってきたわけです。その
面では東北はものすごく遅れたわけですね。ところが、それがかえて幸いしているのではないかと。
物の時代から、大量生産・大量消費・大量廃棄という時代から、人口が減ると合わせて、心を
重視する時代に日本の国全体も大きく舵を切ることになるのだらうと思いますが、それであれば
逆に物質中心のときに後ろを走っていた東北が、180度回れ右して心の時代に走り出せばまさに東
北は先頭に立つだらうと。ただし、東北が先頭に立った場合も、物の豊かさも必要なのです、それ
も追い求めながら、物と心の豊かさ両方を追い求めるという贅沢な目的を持ちながら走れる立場
にあるのがこの東北ではないだらうかというのが一点ですね。

それから、美しさというのはやはり心の表われなんだろうと思います。よく例に出すのですが、
赤ん坊を抱いたお母さんの顔というのは美しいですよ。やはり心の状態が顔に出るからですね。
それと同じように、まちな美しさというのはその「まち」に住んでいる人の心映えが出るんだらう
と思います。そういった意味で、私は何で東北が好きなのだらうと思ったら、よくよく突き詰めて
考えてみれば、東北に住んでいる人の心映えの美しさといいますが、それにかかなり感動している部
分があるのではないかと思います。

これは東北だけに限らないわけではありますが、関西で生まれ育った者としては、関西というところ
はいつ足元をすくわれるかわからないぐらいの油断のならないところがありまして、私が中学1
年の時、友達の病気見舞いに行ったときに、「まずお茶漬だけでも食べていってください」としつこく

勧められるので、一遍帰りかけたのを上がったら何も用意していなくて、とんだ恥をかいたことがあるんです。京都というところは恐ろしいところだなと思った記憶があるのですが、そういうところは東北は全くない。実がある。心映えが高い。そういう意味でも美しい国土を造れるのは東北がまず最初ではないかという思いは非常に強くしています。

活性剤として ” よそ者 ” を交える

司会（遠藤）　ありがとうございます。非常に重要なお話で、歴史、文化、伝統、これをまず大切にしながら、そして心がある景観、心映えが大事であるというお話でございました。そしてまた東北についてお褒めの言葉をいただきまして、本当にありがとうございます。

それで、これから近未来、10カ年で東北はどうしていったらいいかというお話だったのですが、今、お二方から大体こういうふうにしたらいいいのではないかというお話がもう出ておりますので、ほとんどまとめになってしまうんですが、一点だけ。東北といいますと、今お褒めの言葉をいただきました心映えの話なども大変ありがたくあるかと思うのですが、自然が豊かであるという話も一つございまして、これにつきまして、自然が豊かだから、おごるなかれという話もあるかもしれませんが、それに配慮して景観をこれから創っていくのであればどうすればよいかとか、もしコメントをいただければありがたいところでございます。篠原先生、お願いします。

篠原教授　遠藤さんが言われているのと違う話でいいですか。

司会（遠藤）　それは全く構いません。

篠原教授　自然が豊かだから云々という話はそれはそれで重要だが、もっと東北の人に聞いてもらった方がいいかなという重要なことを一つか二つ話します。

一つは、アドバイザー制度を5年間やりました。それで、見渡すと、主として大学とか研究所にいてデザインとか景観の指導をできる人間が当時はほとんどいなかった。唯一、東北大に平野君（東北大学大学院 情報科学研究科 講師 平野勝也氏）がいるくらいですかね。だから、いつまでも東京勢に頼っていいのですかという話。これは大学に言わなければいけないのかもしれないが、逆に言うと大学にプレッシャーを掛けてくれてもいいと思うのです。独立法人化した訳だし。役所というか、公共事業としてはそういう人材が必要なわけだから、正々堂々と言ったらいいのではないかと思います。いつまでたっても東京から来てもらうことについて、僕は嬉しいのですが、それでいいのですか？という話の一つ。

もう一つはちょうど逆で、矛盾したようなことを言いますが、両方とも正しいので申し上げます。もう随分前になりますが福井県で勝山橋というのをやりました。県の事業だったのですが、2000年に完成したから、行き始めたのがその7年ぐらい前、1993年ぐらいでしょうか。あるとき福井県庁の人と飲んでいまして、何かの弾みで「東京は元気ですよね」という話になったんです。ちょっと酒を飲んでいたせいもあるが、「はい、はい」と言っているだけではつまらないから、

「じゃあ何で元気なんだと思いますか」と逆に聞いたんです。そうしたら、「さあ。お金もあるし、人もいっぱいいるし」と言うから、「いや、そうじゃない」と。東京には色んな側面があるが、元気なのは何かというと、「よそ者だらけ」だからだ。統計によると、江戸時代から江戸、東京に住んでいる人というのは非常に少ない。だから、よそ者が、いろんな奴が来てワイワイやっているから元気なのです。「ところで福井県庁は福井県出身以外の人は何%いますか」と申し上げた。そうしたら黙ってしまった。多分土木でいうと、地元でいうと福井大学に行って、あるいはちょっと県外に出るのだったら隣の金沢に行ったり京都に行ったりして戻って県庁に入っている人が多いのではないのでしょうか。だから、地元というのは大事ですが、地元勢だけで固めていると、これはまた発想が固定化してしまうと思うのです。思い切ったことができない。

さっき言ったように、地元で地元のことをケアする、本当の専門性を持ってケアする、デザインとか景観とか、環境も入ると思いますが、そういう人間をどのくらい育てるかというのと同時に、逆に、活性剤としていろんな人間を引っ張ってきて、東北ファンになってもらって、細かく言えば盛岡ファンでも仙台ファンでもいいのですが、そういう人間を交えてフランクに議論できる場をうまく設定できるかどうかというのが非常に重要だと思います。

それが割とうまくいっているのが、日本でいうと九州だと僕は思うのです。外の人間に対して閉鎖的ではないですね。えてして、東北、北海道、北陸あたりはそういう（閉鎖的な）傾向がちょっとあるのではないかなと僕は思います。褒めてばかりいてもしょうがないので、そのところをちょっと注文というか、今後にとって重要ではないかなと思ったので申し上げました。

青山理事長　私もそれに関連しては、役場の方の存在というのは大事ですね。山形県に金山町という町があるのですが、岸さんという方が長い間町長をしておられて、今国会議員をやっておられます。その後、松田町長さんになった。やはり役場の職員の方が生き生きと仕事をしておられるんですね。美しいまちづくり一つとっても、金山杉の家を造ろうと。何年か経って見に行ったらかなり増えているんです。まち並みがかなり変わっているのです。ものすごく嬉しいですね。

東北の人というのは火がつくのはなかなか遅いのですが、一旦情熱の奥底に火が灯ると持続性というのがものすごくあるんですよ。

そこは九州とちょっと違うのかもしれませんが。継続性という意味では、美しい国づくりをやるのに東北の役場の方の心、もしくは整備局の職員の方の心、それから県の職員の方の心に一旦火が灯ると、これは強いものがあるのではないかと思います。そういった意味では、特に役場の方、市町村の方も。



もう一つ例を言いますと、手づくり郷土賞^{ふるさと}というのがあります。岩手の新里村だったか、どこかの施設が受賞したのです。そのプレゼンテーションをしてもらったのですが、実際は一度、絵を東京のコンサルタントに来てもらって描きましたと。でもこんなだったら自分らで考えた方がいいということになって、職員が直営で絵を描いて作りましたというプレゼンテーションがありまして、岩手の宮古と盛岡の間の小さな村ですが、そこで職員の方がそこまでプライドと情熱を持って絵を描いていて、それがまた実際に手づくり郷土賞^{ふるさと}に選ばれたというのは、ものすごくある意味では感動しました。そういう要素はあると思うのです。だから、特に役場の職員の方の意識というのは大事だと思います。

東北から面白いことを仕掛ける

司会（遠藤） 大変ありがとうございます。多少方向性が微妙に入り乱れたお話でございますが、例えば東京ものにばかり頼るなど、とは言ってもよその方に対して九州のようにオープンになるべきであると、そして役場が第一線でありまして非常に大事であるということで、なお本日会場に金山町の職員の方も見えております。それから、継続性、これは東北の強みですので、続けていって頑張っていたきたいというエールでございました。そのように受け取っております。

それで、お時間も大分迫ってまいりましたので、今ご指摘していただいたとおりでと思うんですが、これはもう一つ指摘されたいというお話がありましたら是非お願いしたいと思います。

篠原教授 では、二つだけ。

一つは、今日事例報告で北上分流堰の紹介がございましたが、私も委員会に入っておりますから知っています。歴史の方を担当されていたのは郡山の日大にいる知野先生で、歴史の資料はちゃんと残っていて、担当された主任技師は並川熊次郎さんという人で青山さんの先輩ですよ。京大出身ですね。7年ぐらいやっていたのでしょうか。何を言いたいかということ、ああいう放水路を造って、洪水のときに放水路から海に出すというのは、全日本的に言うと信濃川の大河津分水ばかりが有名で、僕は北上分流などは習ったことなかったですよ。大河津分水は知っていましたが。それは担当した人が青山土とか、宮本武之輔とかで、後に偉くなったからですが。今は河川の施設について言っていますが、僕は北上分流堰の方が大河津分水より価値があるのではないかと考えているのです。大河津分水ももちろん見えますが。先程所長さんが淡々と報告されましたが、大河津分水の方も重要な施設だから昔の堰は残したのです。残したのだが公園化してしまって、そこはもう水が流れていないんです。この北上分流堰は多少補修しなくてはいけないと思いますが、そのまま平常時は水が流れている施設なわけですから。これは土木の施設にとっては極めて重要で、水が流れていなければこの堰がどういう意味があるのかわからないですよ。

だから、最近の言い方で言うと、僕は余り好きではないのですが、**非常に価値のある”お宝”をいっぱい持っているのが東北だと思うんです。**多分、野蒜の築港の跡もそうでしょう。それから、

あの辺に明治潜穴とかいろんな潜穴もありますよね。河川のことばかり言っていますが、橋だって結構いいのが残っているし。その辺を全国レベルの目で見ても大いにPRして、さっき青山さんが東北というのはちょっと遅れていたと言ったが、それは高度成長以降の話で、結構いいものがいっぱいあると僕は思うんです。だから、それを大いにPRされて情報発信するのがいいのではないかな。確かに紅葉はきれいだし、大自然はありますが、それだけではありませんよというのをもうちょっとPRされてもいいのではないかなという気がします。

あとは、さっきよそ者も呼んで議論しなくてはいけないと言いましたが、知った者同士が集まっていつもニコニコ、気心が知れてと、それはそれでハッピーだが、それではやはり発展とか進歩というのはないですね。やはり人間が進歩するのは、ある意味、競い合うことが必要。だから、東北地整の局の中に事務所が随分ありますでしょう。局同士で競うということも必要だし。さっき紹介がありましたように、プロポーザルは結構やってきましたが、もっともっとコンペをやってほしい。今日配っていただいた裏表紙の下の方に、平成16年土木構造物デザイン設計競技「景観開花。」と。これは東北大でやっている企画で、東北地整も応援してくれている若者向けのコンペですが、コンペでも公開のプロポでもいいんです。それをどしどしやって、日本全国的に、東北は色んなおもしろいことをやらせてくれるのでやっぱり東北に行こうよと。経済的に言うとちょっと「せこい」話になるかもしれないが、例えばコンペをやったら現場も見ないとダメですね。一人で設計もできないでしょうから、コンペをやったら最低平均して3人としても、2回は来ますから、仙台でやれば3人が2回だから6泊ですか。それが100人来れば600泊ですね。それだけでも経済効果があるのではないかと。

つまり、何かおもしろいところには人が集まってくるので、そういう仕掛けを是非ともやってほしい。職員の方は忙しくて大変だとは思いますが、そういうのが活気を生むし、競争を生むし、いいものが東北にこれからも残っていく非常に重要な鍵ではないかなと僕は思います。ですから、いいものがあるよということが、人を引きつけてくる戦略になるということです。

次世代をイメージした国土づくり

司会(遠藤) ありがとうございます。PRが大切であるということと、競い合うということと、今「景観開花。」のお話がありましたので、来週やりますので、そういうコンペも大事であるということとございました。

青山理事長、もしよろしければ最後お一言。

青山理事長 最後ですね。そうしたら、幾つかありますが、土木とか、シビル・エンジニアリングを志し、また現実に従事されている人として、やはり祈りの心を持ってほしいのです。祈りの心といってもそんなに難しい話ではないのですが、例えばダムを造りこれから湛水をするという

きに、大地に対してこれから水を貯めさせていただきますと、いろんな小動物だとか草や木が水の底に沈みますがよろしくと。もしくは山岳道路を造るときは、これから山の斜面を削らせていただきますと、ちょっと山肌が変わりますがよろしくというふうな気持ちをまず持つということが要るのではないかなと思います。

日本の人口が神武天皇以来4億5,000万と三全総の資料書の前文に出ていたのですが、あれからまた年数がたっていますから5億人近い日本民族がこの地に生まれてきた訳ですが、そのうち1億2,700万ですから、4分の1が今住んでいるわけです。ものすごいパワーなのです。これから人口が急激に減っていきますが、現在がまさにピークで、この1億2,700万人のパワーというのはそれこそ有史以来最高のパワーなのです。この間読んだらロシアの人口が1億4,000万だといっていましたから、ロシアと肩を並べるぐらいの人口が今この日本列島、それもとても狭い平地部分に、大体8万平方キロぐらいでしょうか、そういう部分に住んでいる訳ですね。ですから、それは祈りに近い心を持って住んでいくといえますか、この大地の上に住んで生活を営んでいくんだという心が要るのではないかなというのが一点です。

それから、次の世代を考えるとこの気持ちを是非持って欲しいのです。そういった意味では東北整備局などはすごいパワーを持っている訳でありまして、また各県または市町村の役場の方もすごい力を持っておられる訳でありまして、その方たちが次の世代、少なくとも30年、50年というオーダーをイメージしながら国土づくりをやっていただければなと思いますし、また、一旦そういう文化ができれば、東北というのは持続するパワーのある地方ですから、私は大いに期待できるのではないかと。まさに日本の心のふるさとであり続けるのではないかと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

司会（遠藤） どうも大変ありがとうございました。

ご対談も、これからますますもっといろんなことをお教え願えるのではないかとこの雰囲気になったところで、申し訳ないのですがお時間ということで、今、情感というお話と祈りの心が大切ということでございました。ありがとうございました。

せっかくですので、会場からご質問等があれば、お受けしたいと存じますが…。ご質問はありませんか。皆様、感動でいっぱいということで。

それでは、私どもこれから東北で景観関係の業務などを進めていく上で、今日は担当者の方、また皆さん、たくさんの方においでいただいております。本当にたくさん示唆に富んだお話、どうもありがとうございました。

これで対談を終了させていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

司会（庄司） 青山様、篠原様、どうもありがとうございました。どうぞ盛大な拍手でお二人をお送りください。本当に今日は貴重なお時間、そして貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。

今、最後、皆様から質問の手が挙がらなかったようですが、それぞれに心の中に感じていただいたことがたくさんあったかと思います。先程もお話に出ましたが、情報の共有ではなく情感を共有すること、また、美しさは心の表われであるという二つの言葉、私も身にしみて感じました。



閉 会

～美しい国土づくり10周年記念～

東北の景観を考える座談会

主催：国土交通省 東北地方整備局

後援：(社)東北建設協会、東北建設業協会連
合会、(社)日本土木工業協会東北支部、(社)
建設コンサルティング協会東北支部、(社)土木
学会東北支部、(社)日本技術士会東北支部

入場無料 定員 270名
(参加のお申し込みが必要です)

平成17年 **12月9日(金)**

時間 **13:30～15:40**(開場 13:00)

会場 **震災復興記念館 記念ホール**
仙台市青葉区大町二丁目12-1

国土交通省 東北地方整備局が平成8年から先駆的に取り進んできた
「美しい国土づくり」が今年で10周年を迎えました。

その間、東北の景観はどのように変わったのか？ 今後どのように変わっ
ていくべきなのか？美しい国土の実現に向けた取り組みについて、有識
者からの意見・提言をいただき、東北の景観を考えていくきっかけとするこ
とがこの座談会の趣旨です。



●座談会

青山 俊樹 氏 (水資源機構 理事長)

篠原 修 氏 (東京大学大学院 教授)

●美しい国土づくり事例報告

●参加申し込み方法

参加ご希望の方は裏面をご覧になり、必要事項をご記入の上、**11月25日(金)**
までにFAXまたはメールでお申し込みください。＊定員になり次第締め切らせていただきます。

お問合せ先 国土交通省 東北地方整備局 企画課 TEL: 022-225-2171(内線 3186)

東北の景観を考える座談会 対談録

平成18年1月

お問合せ先 | 国土交通省 東北地方整備局 企画部 企画課 事業景観係

TEL: 022-225-2171(内線 3186) FAX: 022-221-9890